

Hattie の孤独と死の主題 — “Leaving the Yellow House” の 批評と鑑賞（I） —

半 田 拓 也*

Saul Bellow (1915–2005) の短編集 *Mosby's Memoirs and Other Stories* (1968) の巻頭に収められている短編 “Leaving the Yellow House” (1957)¹ は、Marianne Nault の書誌によれば、ベローの原稿の中に、“Leaving the Yellow House” とタイトルが付けられた最終稿のほかに、“Hattie's Will. Hattie I” と題された notebook 1 や、その続きの “Hattie II” と題された notebook 2 などが残っている (68)。これからも明らかなように、この作品は当初から Hattie の物語として意図されていた。この女主人公 Hattie は 1885 年の生まれ、年齢は物語が進行している時点 (1957 年) で 72 歳の高齢者である (37)。舞台はアメリカ西部の砂漠地帯にある Sego Desert Lake で、ここはサンフランシコまで 500 何マイル、ソールト・レイク・シティまで 200 マイルとされている (14)。橋本賢二氏の『アメリカ短篇小説の伝統と繁栄—20 世紀作品論』は、この作品を論じた数少ない研究書の一つであるが、ラスベガスからグランドキャニオンへ向かう飛行機の中でフーヴァー・ダム の偉容が目に入ったとき、この「黄色い家」の舞台となった小さな村を探したが見当らなかつ

* 福岡大学人文学部教授

たというエピソードを書き、「シーゴ・デザート・レイクはカリフォルニア州南部のモハーヴェ砂漠の近くに実在するという説やネヴァダ州の湖であるとする説もある。ともあれ、こんな砂漠地帯のなかで、たとえ湖があろうとも、人が暮らしてゆくということは、到底不可能なように思われた」(236)と述べている。

物語は、この「不毛の土地」“barren place” (5) で、Hattie の車が鉄道のレールに乗り上げ運転できなくなったので、助けを求めるが、車を牽引する際にチェーンに足をすくわれ転倒し、Hattie が左腕を骨折するという出来事をきっかけとして展開する。二度も手術をしたが、結果的には Hattie の左腕に癒着が起り、再び車を運転できそうにはない。そこで Hattie は、自分の死について考えを巡らし、数年前に自分の所有物となり、今住んでいる黄色い家の相続について考えざるをえない。相続人の候補について、あれこれと考えた末、ending において Hattie は家を自分自身に譲りたいという手紙を弁護士の Claiborne に書く— “And so I’ll tell you what, I leave this property, land, house, garden, and water rights, to Hattie Simmons Waggoner. Me!” (42)。が、これにはさらに落ちがあって、Hattie はそんなことはできない、こんなことを書いたのは酔っているせいだと考え、明日はきっと結論を出そうと考えるところで、この物語は終わる。

投函されない手紙は Herzog を思い出させるが、ベローは投函されない手紙の着想をこの Hattie から得たのかもしれない。それはともかく、この作品は短編とはいえ、42 ページの長さを持つだけでなく、フラッシュバックを用いて、ベロー得意の回想シーンを挿入し、Hattie のこれまでの生涯を描いている。エンディングも微妙な意味合いを含ませたオープンなエンディングとなっており、ベローの特徴が現われている。作中 leave という語が 12 回ほど使われるが、そのうち 2 回は Hattie がこの家から物理的に去る、離れるという意味で使われており (21, 42)、10 回は遺贈するという意味で用いられている

(15; 19 は 2 回; 30 は 4 回; 39 は 2 回; 42)。

本論文において私は、この作品の主要なモチーフと思われる Hattie の孤独と死の主題について考察をしたい。順序として、論文Ⅰではこの作品の構成を振り返り、Hattie の性格づけを確認した上で、この作品に関する批評を検討し、論文Ⅱで関連するベローの推敲跡を辿りたいと思う。ベローの推敲については Daniel Fuchs の原稿との綿密な比較研究があり、Fuchs は “Leaving the Yellow House” についても興味ある観察を述べているが、*Esquire*, 49 (January, 1958) に掲載された version (以下、初版と呼ぶ) と、短編集 *Mosby's Memoirs and Other Stories* に掲載されている version (以下、第二版と呼ぶ) の違いについては、まったく触れていない。ところが、両者の間には、私のカウントでは、合計 187 箇所²もの異同があった。したがって、これらの推敲についての考察は、Fuchs の研究を補完するものであり、この作品においてベローがどこに強調を置こうとしたかについて示唆を与えてくれると考える。論文Ⅱでは併せて、この作品の後半に現れる、Hattie の難解な独白、“They drew you from yourself.” (33) というセンテンスを中心にして、Hattie にとって死がもつ意味を探りたい。

1

この作品は、初版の *Esquire*, 誌に掲載された version では、7つのセクションに分けられていたが（各セクションの始まりの一文字はゴシック体の太字を用い、セクション間には一行のスペースが空けられている）、第二版では、9つのセクションに分けられている。分割されたセクションは、初版のセクション2とセクション3であり、これらは第二版ではセクション2から5を構成している。以下、現行版である第二版によって、この作品の構成を振り返ってみたい。

セクション 1 は、比較的長く (8 ページ)、イントロダクションから事故発生の状況、骨折した Hattie が黄色い家に戻るまでを描いている。次の引用は冒頭のパラグラフであるが、Hattie 自身と Hattie が置かれた状況を簡潔に表す、見事な導入部である。

The neighbors—there were in all six white people who lived at Sego Desert Lake—told one another that old Hattie could no longer make it alone. The desert life, even with a forced-air furnace in the house and butane gas brought from town in a truck, was still too difficult for her. There were women even older than Hattie in the county. Twenty miles away was Amy Walters, the gold-miner's widow. But she was a hardier old girl. Every day of the year she took a bath in the icy lake. And Amy was crazy about money and knew how to manage it, as Hattie did not. Hattie was not exactly a drunkard, but she hit the bottle pretty hard, and now she was in trouble and there was a limit to the help she could expect from even the best of neighbors. (3)

すなわち、冒頭のセンテンスから Sego Desert Lake には、白人は全部で 6 人しか住んでおらず、彼らは年をとった Hattie はもう一人で生活するのは無理だろうと言い合っていたというように、Hattie の窮境が語られ、パラグラフを閉じるセンテンスには、いくら近所に親切な人がいると言っても、助けには限度があると作品全体の雰囲気を表している。また、Hattie の性格が、Hattie より年上であるが、気丈で、健康で、お金の使い方を知っている Amy Waters と対比して描かれ、Hattie が酒好きであることが語られる。Hattie の家には強制送風式の暖房炉があり、butane gas、つまりプロパンガスも、町まで買いい行って使用している。

以下、Hattie の生い立ちや近所の人たちの描写があった後、事故の顛末が語られる。Hattie は 20 世紀が始まる前に花嫁学校を終え、パリでオルガンの勉強もしたが、今ではオタマジャクシとフライパンの区別もつかない、とベローはユーモラスに書いている。事故に逢うまでは、週に一度ドレスを着て、40 マイル離れた町に冷凍食品やウィスキーを買いに車で日帰りをしてきた。制限速度を守らず、くわえ煙草をした。町では昼食時にマティーニを 2 杯飲んだ。近所の白人仲間としては、Rolfe 夫妻と Pace 夫妻くらいである。Rolfe 夫妻は金持ちの隠居暮らしで、Pace は観光客相手の牧場を所有している。Pace 家には Darly というカウボーイがいるが、Pace と違って、本物のカウボーイでなく、40 歳になるまで馬に乗ったことはなかった。Hattie と Darly は「生粋の西部人」“genuine Westerners” (7) ではなかった。Hattie には離婚歴があり、離婚後は Wicks というカウボーイといい仲になったが、その Wicks も離れていった。Hattie はベッド (sack) では彼にかなう者はいないなどと言ったが、荒っぽい、経験豊かな西部女と思われたいのだ。

事故はある夕方、Hattie が Rolfe 夫妻のところでマティーニを数杯飲んで帰宅する途中、鉄道の踏み切りでハンドルをとられ、車が線路に乗り上げ、動かなくなって起こった。Pace 夫妻のところでバーテンの仕事をしていた老いた Darly がトラックで Hattie の車を牽引する。が、チェーンを二重にしなかったために、うまくいかず、同行したタングステン鉱山の男にチェーンが長すぎると注意されたために、Darly はチェーンを短くする必要がないことを示そうと、また早く済ませようとして発車し、ちょうど跨ごうとしていた Hattie は足をすくわれ、転んで腕の骨を折る。牽引はうまくいき、Darly は Hattie を Rolfe 夫妻のところへ送る。

セクション 2。Rolfe 夫妻は手当てをし、Hattie を黄色い家まで送り、寝かせる。Helen Rolfe は電気パッドを腕に巻いてあげるが、Hattie は発電機が回って、プロパンガスが無くなるという。Jerry Rolfe に「ケケケチする場合では

ない」と言われて、Hattie はムッとするが、この土地では本当の友人は Rolfe 夫妻しかいないと考え、口答えはせず、二人が帰ってからパッドのスイッチを切る。Helen は Hattie に掛けぶとん (comforter) を掛けてやっていたが、Hattie は、このふとんは亡くなった友人の India のものなんだろうかと考える。Hattie はこの India から現在の黄色い家を譲り受けたのであるが、今はそれが肌に触れるのが嫌で、下にずり降ろす。(死の想念を振り払おうとしているように思われる。) それから、Hattie は自分の人生がフィルムに撮られており、来世では映画を観るように、様々なシーンを観るだろうと想像する。目を覚まししながら、フィルムも残り少なくなったなどと考えるのは最悪で、睡眠を愛する Hattie は不眠症より死んだほうがましだと考える。

セクション 3。接骨は初回はうまくいかなかった。二回目の手術の後、精神が散漫になり、譫妄状態のときには病棟をうろついた。部屋に閉じ込められると、看護師に「民主主義の国では裁判なしに人を囚人にはできないのよ、このアマガ」と毒づいた。Hattie は悪態のつき方を Wicks から教わっていたのだ。数週間、頭がはっきりせず、口を開いて笑うこともなかった。Hattie はフィラデルフィアの信託銀行に小額の口座をもっており、毎月 80 ドルの支払いを受けていた³。Rolfe 夫妻は心配し、Jerry は Helen に、俺たちで救ってやらないといけない、親戚に電話をしないといけないかもしれないと話す。

セクション 4。が、結局 Hattie は回復し始め、親戚は呼ばないですむ。Hattie の意識は混乱していたが、見舞い客は分かるようになった。Hattie はこれまでに起こったことの多くを思い出せず、何クォートの輸血をしたか尋ね続けた。返さなければならぬ血のことが頭から離れず、いつもの話題になったが、やがて Hattie に笑いが戻り始める。医者は Hattie に煙草と酒を禁じるが、Hattie がこれらを断つことができるか、Rolfe 夫妻は懐疑的である。お金のことが心配な Hattie は、Jerry Rolfe に相談するが十分な保険もなく、Hattie が家にある貴重品 (valuables) を売ろうかと言うと、Jerry は売らな

くてはいけないのは、この家だと言う。二人は家の値踏みをするが、意見が合わず、最初 2 万ドルと言った Hattie は一万 5 千ドルまで下げる。このとき Hattie の声は力を取り戻していた。この会話の中で、Hattie は Jerry から、もし India がこの家を残していなかったら、自分の鍋さえもてなかっただろうよ、と言われて傷つくが、Jerry は本当のことを言ったに過ぎなかった。Hattie が事故を Darly のせいになると、Jerry が Hattie も酒を飲んでいたと返すので、Hattie は事故はくしゃみのせいだったと言う。このセクションは次のパッセージで終わるが、ここの「永遠に生き残る人間」を Hattie が不屈の精神をもつ証拠として、批評家が引用するケースもある— “But her face was cleft by her nonsensically happy grin. She was not one to be miserable for long; she had the expression of a perennial survivor.” (15)。

セクション 5。Hattie は一日おきに療法士 (therapist = 投薬・手術など) によらずに障害者の社会復帰を助ける治療専門家) のところに通い、この若い女性に腕を動かしてもらうことはうれしく、心がなごむことであった。プーリーにかけたロープの両端をもって鋸をひくように動かす運動もしたが、Hattie は最も大切な運動をずるけた。それは手のひらを腰の高さで壁につけ、指先を動かしながら、手を肩の高さまで引き上げるというものだった— 医者は癒着を心配し、Hattie に注意をしていたのだが。Hattie は夜も昼も「私は死の谷にいたの。でも生きているわ」と繰り返したが、顔は笑い、ちょっとした親切な言葉にも心は温まった。みんな私を助けてくれるわ、Helen も Jerry も私を愛してくれているし、私も愛しているわ、と Hattie は考える。空想の中に India の亡霊が時々現れて、「庭がめちゃくちゃになるわ。あのライラックの茂みはしばんでるじゃないの」と Hattie を叱るが、Hattie は「我未だに汝の僕なりや」“*Am I thy servant still?*” [sic] (17) と思う。Hattie は India に酒を飲ませていけないことになっていたが、二人はしばしば朝食が終わると飲み始めたものだった。India は酔ったあとで後悔したが、Hattie にはそれも辛

いことであった。が、India の死後に彼女が書いた詩が何篇か見つかり、その中で India は Hattie のことに愛情を込めて触れていた。Hattie は、文学は良いものだと思った、教育があり、育ちが良いということも。教養 (ideas) に関しては、Hattie の関心は非常に薄かったが、India は東洋の宗教、Bergson、Proust など、世界を逍遥していた。India は Hattie を召使のように扱ったが、後で泣きながら許しを乞うた。Hattie は「私はクリスチャンよ。恨みなんかしないわ」と許すのだった。Hattie には、夫もなく、子供もなく、技術もなく、貯金もなかった。Jerry Rolfe は、India が家のほかに現金を残してくれていたらよかったのに、と Hattie の友人に洩らす。

セクション 6。Hattie は湖に帰ると、Rolfe 夫妻の居候になった。目はうれしそうで、彼女は再び勝ち誇ったように見えた。笑いながら、手にはチェリーとオレンジの薄切りの入ったバーボン・オールド・ファッションをもっていたが、酒量が決められており、Rolfe 夫妻は日に 2 杯しか許さなかった。「こんな素晴らしい春はこれまでなかったわ」と Hattie は夫妻に感謝して言う。服も自分で着られるようになっていて、元気なときには自分の家まで出掛けた。車のエンジンをかけてみると、大丈夫で、うれしそうにタベットの音に耳を澄ますが、ギヤやハンドルはまだ動かせない。庭の面倒は保線工夫の Sam がみしてくれていた。留守中に Pace の馬が庭に入って、ただの草を食べた様子で、Hattie は一瞬、Pace に怒りを覚えるが、持続せず、「それは全身を包む、うっとりするような満足感に吸収された」(21)。遠くで Pace の馬が草を食べるのが見え、その完全な美しさ、石にあたる蹄の音が Hattie の心の琴線に触れる。Hattie は馬、鳥、犬が好きで、なかでも犬が一番好きだった。Hattie は、持ち犬だった Richie がちぎった毛布の切れ端から、愛犬を思い出す。India のいた部屋のドアノブには犬の首輪がかかっていた。Hattie は今度は自分がこの黄色い家を去る (残す) 番だと、遺言のことを考え、ため息をつく。そうしたことについては、Hattie は町で弁護士の Claiborne に電話をして相

談していた。家の売価は最低でも一万五千ドル、賃貸の場合は月 200 ドルが彼女が決めた家賃だった。India のソファに座っていると、Sam が暑い中をバラの花に水をやっていた。感謝して、Hattie は Sam を呼び、缶ビールを渡す。また、Sam はお金を受け取らないので、Hattie は彼に町で古着を見つけて与えたり、食べ物を与えたりした。Hattie は 6 月中旬になっても、まだ運転できなかった。Helen Rolfe が Hattie に 7 月の第一週に Jerry と一緒にシアトルに行くと言う。これは自分たちの助けにも限度があることを彼らの流儀で伝えたものであった。Jerry は Hattie のドーベルマン犬を殺したのは Jacameres ではないと言う。Hattie は犬がいなくなり、寂しかった。犬のことが心に重くのしかかり、涙がでそうになり、自分の秘密にしめつけられながら眠った。

セクション 7。Hattie がぐずぐずと先延ばしにする老女であることには変りはなかった (“still the same procrastinating old man”) (28)。Hotchkiss 保険会社からの手紙はどこへいったか分からない。Hattie はある朝、老人の財産を引き取って、管理してくれるロスアンゼルス会社に当たってみると Helen に言ったが、パンフレットの請求もしていない。Jerry Rolfe は、Hattie の状態を知らせるために、弟の Angus に手紙を書いてくれ、また、金山鉦夫の未亡人、Amy Waters のところへ相談しに行った。Amy は非常にデリケートな顔の持ち主だった。湖での冬の水浴、野菜スープ、グランド・ピアノで弾くワルツ、殺人小説—そんな生活が彼女を別世界の人のようにしていた。Rolfe に Hattie と一緒に住まないかと聞かれて、Amy は習慣も違うし、酒も飲まないし、と答える。乾いた空には雲一つなく、Amy に死の影はない。彼女には、これから長い間、命をゆっくりと養う純粋な液体というようなものが備わっているようだった。彼女はお金を払ってくれれば、一日に 2, 3 時間、家に行ってもいいと言うが、Rolfe は Hattie には年金以外に金はないと言う。Amy は、Hattie が遺言であの家を私にすれば、世話をしてもいいと言う。

Rolfe がそれなら、お前も遺言で家を譲らなければと言うと、Amy は、私は助けてもらう必要ないと言う。

セクション 8。Rolfe は Amy の提案を Hattie に言えなかった。しかし、Pace はそれほど Hattie の気持ちを考えなかった。6 月中旬には Hattie は Pace のバーを定期的に訪ねるようになっていたが、ある日、Pace は、今現金で 500 ドル、毎月 50 ドルを払う、その代わりに観光客を黄色い家に泊め、遺言で家を自分に譲るんだ、ともちかける。この提案を Hattie は断る。Pace は、また酔っぱらっているのだろうと言うが、実際ひどく酔っていた。Hattie は、Pace が法廷で黄色い家は India が譲ると約束したと嘘を言いかねないと思い、家に戻り、弁護士の Claiborne に手紙を書く。酔っぱらいが小型飛行機を湖畔に墜落させたとき、Pace に全責任をかぶせられたこと、料理係りが包丁をもって自分を追いかけたのも、Pace がバーの入金のことで、この女をだましたから、などと書いた後、Pace にはこの家の請求権は一切ないと書いた。しかし、この手紙は投函しない。怒りはすぐにはおさまらなかったが、最後にはいつものように窓の外を眺めた。この外を眺めるシーンは、批評家がよく引用する箇所、次の通りである。

She always ended by looking out of the window at the desert and lake. They drew you from yourself. But after they had drawn you, what did they do with you? It was too late to find out. I'll never know. I wasn't meant to. I'm not the type, Hattie reflected. Maybe something too cruel for women, young or old.

So she stood up and, rising, she had the sensation that she had gradually become a container for herself. You get old, your heart, your liver, your lungs seem to expand in size, and the walls of the body give way outward, swelling, she thought, and you take shape of an old jug,

wider and wider toward the top. . . .

I was never one single thing anyway, she thought. Never my own. I was only loaned to myself.

But the thing wasn't over yet. And in fact she didn't know for certain that it was ever going to be over. You only had other people's word for it that death was such-and-such. How do I know? she asked herself challengingly. (33)

砂漠と湖を見ると、「私から自分が抜け出した」という不思議な文章があるが、これについてはこの論文の後半で論じたい。また、「私は自分に貸し付けられただけ」という文についても、併せて考察したい。次に Hattie は自分の誕生から死までを撮影した映画を観るように、昔の映像を観る。オルガンの教師がよく連れていったパリの教会、別れた夫の James John Waggoner IV、同棲したカウボーイの Wicks。James は美貌でもなく、大した知性もなく、フィラデルフィアの家族のほかは何もなかったが、Hattie は彼を愛していた。James は Hattie に飽きていた。離婚後 Hattie は、Wicks を好きになるが、Waggoner の名前を捨てることはできなかったから、Wicks と結婚できなかったのだ。

セクション 9。それから、その映画には、Hattie が見たくないと思っていたシーンが現れた。それは、Hattie が飼い犬の Richie を殺すシーンだった。犬が襲いかかり、Hattie が斧で殴り、即死したのだった。それから、突然 Hattie は何週間も先延ばしにしていたこと、車を動かせるかどうかを試そうと決心し、やってみたが駄目だった。手動ブレーキに手が届かず、ギアシフトもできなかった。家に帰り、バーボン・ウィスキーを飲み、「遺言」と書いて、すすり泣いた。誰が黄色い家を継ぐのか考え続ける。兄弟、甥、いとこたち。Merton、Anna、Joyce、Marian、Half Pint、修道会士の Louis、Wicks—

Wicks との喧嘩を思い出して、また泣いた。二人は軽食堂を開いて生計を立てていた時期があったが、Wicks は食べ物の中で不平を言い、レジからお金を取り出し、ステーキを買ってきて、「焼け」と命じた。Hattie は、Wicks が食べ終わるのを待って、ピストルを向け、「絶対に帰って来ないで」と言った。Hattie は落ちぶれるのに、耐えられなかったのだ。今 Hattie は、自分は傲慢な俗物だったと後悔する。Hattie はひどく酔って書いた。余りにも早すぎます、家のことを諦める準備ができていません、だからこの家を私に残します、という主旨であった。今夜だけはこの家を手放せない、酔っているから必要なんだわ、明日はきっと結論を出そう、と自分に約束する。

このように、この作品には周囲との心の通い合いが得られず、孤独に悩む Hattie の状況と心理が描かれているが、この構成とテキストから、ベローは Hattie に次のような性格づけをしていると言えよう。

1. 虚栄心が強く、俗物的な面をもつ。
2. 個人主義的な面も見られるが、それは世間的な水準に近く、周囲の人々に対する感謝の念も忘れてはいない。
3. 人々との心の触れ合いを求めており、心が通い合う瞬間は Hattie にとって、うれしい瞬間である。
4. 死や生の意味、人生の意味の探求者としての性質をある程度、もっている。人生の意味など自分には分からないと考えることもあるが、そのように自己を観察すること自体が探求者の素質を示している。
5. この素質は、知識人のものではなく、教養や学問にはあまり興味をもたない凡人のものである。それは生まれつきの、先天的なものとして与えられている。

2

この作品に関する批評を考察する場合、橋本賢二の『アメリカ短篇小説の伝統と繁栄—20世紀作品論』は、この短編の分析に40ページ以上を割いた貴重な文献であるが、橋本は、この作品の批評状況を、次のように概観している。

この短篇に対する一般的評価は、まだ未知数と言ってもよいだろう。今のところ外国の研究書のうち、この作品を取り上げているものはほんの数冊で、何冊か出ている日本の研究書のうち、この作品を取り上げているものは、現時点で一冊だけである。しかし、それらの場合でも、扱いは極めて軽微で、日本のものは2ページ足らず、外国の場合でも、作品研究と呼べるものは、2、3冊あるだけである。(213)

そして、橋本は「それらのなかでも大きく扱われているマキャデンのものでも、5ページ程度というのが現状である」と述べた後、McCadden、Dutton、Fuchsの主張を手短かにまとめている。橋本によれば、共鳴できる部分を一番多く含んでいるのがMcCaddenのもので、McCaddenは結末を「他の作品と違い、人間存在のはかなさを承諾し受け入れていくのではなく、逃れない現実から、感傷的に避難しようとしている」ととらえ、「この作品は、彼女が黄色い家を自分に譲るという行為で最高潮に達する、ハティの徐々なる崩壊を描くめめそめそしい話だ」としている(213-14)。橋本は「この部分に関して少し異論がある」と述べた後、自らの論を展開している。それは結論的には、「今夜だけは、その黄色い家は自分のものだ、と言うハティは、人生の見方にもひとつの考え方を提示する。・・・人は常にどんな終りにさしかかっても、諦めずに、自らの終りを受け入れずに、与えられた時を生きてゆくのだとする思想が、ハティの無我夢中のお言葉と行動の中に、無意識のうちに表明されている」、

そして「この漠然とした考え方は、やがて作者ベロー自身が作品を追うごとに徐々に明確にしていく『今を生きる』という思想につながってゆく」というものである（233-34）。この結論に至るまでの議論について、詳しく述べるスペースはないが、Hattie に必ずしも悲観的な人生観を見ない点において、私は大局的には氏の議論に賛成である。しかし、私の読みはニュアンスが違っている点もあるので、それはこの論文の全体で示していければと思う。

Dutton の批評は、橋本が「ダットンは、ハーゾグや他の作品の主人公と同じく、ハティも不死鳥の役を演じるサーヴァイヴァーだ、と軽く触れるにとどまっている」（213）と述べているように、短いが、McCadden のネガティブな読みに対して、この作品を肯定的にとらえる批評の代表と言える。Dutton は、短編集 *Mosby's Memoirs and Other Stories* が賞賛されているのは正しく、収録されている作品は独立したものであるが、ベローの読者にとって、さらなる興味は、これらの短編が長編とどのように平行しているか、また長編の内容をどのように予見しているか、という点であり、“Leaving the Yellow House” は、この良い例であると言う（167）。すなわち、不毛の砂漠は Hattie の人生がどのようなものであったかを示すのに適切なメタファーであり、読者は彼女の思い出から、彼女の人生が失敗と絶望の連続であったが、まだ諦めきれないであることを知る。自分の年齢と健康を考えれば、遺言を書いて家を誰に譲るかをはっきりしておかなければならないが、彼女はそうできない。うわべは生きるのに値しない生活のように見え、そう長くは続かない人生であるが、Hattie は生を放棄するのを拒む。Hattie は人生を放棄できないのと同じように、家を手放すことができない、この作品から7年後に発表された *Herzog* で、ベローは家を *Herzog* の人生に対するコミットメントを表す metaphor として用い、*Herzog* は自分の殆ど崩壊した家を維持し、新たにやり直そうとするが、Hattie は *Herzog* や他のすべてのベローの主人公と同じように、不死鳥を演じる、と Dutton は読んでいる（167-68）。

Dutton の読みは大筋で賛同できても、テキストに照らして、少し樂觀的過ぎはしないかというのが私の印象である。この点、Fuchs の読みは、ベローの原稿との比較も含み、説得力がある。

Fuchs は、ベローが、まるで苦悩の意味を探求しなければならないという自身の強迫的な欲求を強調するかのように、殆ど孤立した高齢者の世界の中で、殆ど孤立したヒロインを描いており、Hattie は、Henderson や Herzog と同じ（教養やイデオロギーには無縁という点で Henderson により近いが）、「ベローの微笑む受難者の一人」（“one of Bellow's smiling sufferers”）であると述べている（296）。Fuchs によると、「ベローの最も痛ましい孤立者の一人である」Hattie には親密な人がおらず、自分自身だけが親友であり、その結果、遺産の贈与者であると同時に受取人になる。これは運命の犠牲者としての身の上をドンキホーテ的なナルシズム（narcissism）によって変化させることであるが、この唯我論（solipsism = 存在するのは自我だけとする立場）の勝利は幻想であり、行為（deed）というよりジェスチャーとしての成功でしかない。それは純粹に個人主義的で、不要なイデオロギーをもたないが、その排他性に問題を含んでいる、と論じている。また、家は Hattie の identity であり、彼女の人生に一貫性（coherence）を与えるものであるために、他の人に譲ることができないとも論じている。原稿との比較については、次の指摘をしている（295-97）。

（1）初期の version の一つは、“Is she still all there?” 「彼女はまだ頭がはっきりしているだろうか？」という文で始まる。

（2）原稿はベローが 3 人称、1 人称の交替話法への突破口を見つけたことを示している。初期の原稿はストレートな 3 人称で、会話が多くあり、minor な characters (Marion、Halfpint) [sic] が描かれている。

（3）最終の version では、病院でのインタビュー、病院への訪問者、Hattie

の家の賃貸、Hattie の日課の描写などが削除されている。すべて Hattie の孤独を強めるためである。

(4) final version には interiorize (内なるものとする) された描写が多い。これはベローが深い内観に適した文体を見出したことを示している。すなわち、3 人称が知性の客観性と限界に焦点を合わせるが、同時に 1 人称が告白の親密さで読者を味方に引き入れる。

(5) いくつかの初期 versions では遺言の作成は、思いつき (a casual afterthought) として描かれているに過ぎないが、final version では Hattie の孤独を dramatize するものとして、クライマックスにもってきている。

海外の批評としては、以上のほかに、Robert F. Kiernan、Marianne Friedrich、Mike Austin などのものがある。

Kiernan の読みは独特で、Hattie が Augie、Henderson、Herzog のように世界と向き合う知力をもっていないのに威厳があるのは、彼女の怒りっぽい気質だけでなく、Hattie と土地との親密性から来ていると論じている。すなわち、この地域は荒野と火山、大昔の海底の名残である湖に特徴づけられるが、それは Hattie の性格と類似性を示している、ベローは直接には言及していないが、この類似性は明らかである、と論じている。特に Hattie には秘めた闘志があって、それは普段は眠っているが、それはいつ爆発するかもしれない火山のようなものである点を強調している。多くの場面で、Hattie は心の中で人を非難するが、それは抑圧され (repressed)、口には出さない。したがって、この意味では Hattie が酔って黄色い家を自分に残そうとするのは、自我の主張 (an assertion of ego) であり、賞賛すべきものであるが、Hattie が普段見せる、黙認のにこやかな笑いは、悲しい自我の分裂を示している、と論じている。したがって、Kiernan によると、この作品の難解なパッセージの一つ、*“I was never one single thing anyway. . . . I was only loaned to myself.”*

(33)は、Hattie の感情が疎外されている証拠である (114-16)。

Saul Bellow Journal に掲載された Mike Austin の論文、“Saul Bellow and the Absent Woman Syndrome: Traces of India in ‘Leaving the Yellow House’” は、フェミニズム批評であり、ベローの女性観を考える上でも、示唆に富む論文である。Austin は、India の人物像は、Hattie が見る India の痕跡 (traces of India) のみに注目したのでは、完全に把握できず、India 像は我々が Hattie に欠けるものを探るとき、はっきりと浮か上がってくると言う。この観点からすると、次のような二項対立があると論じている。

India = rich、cultured、well traveled

Hattie = poor、uneducated、tied to one place

また、二人が一緒に暮らしていたときには、

India = property owner、provider、master

Hattie = tenant、beggar、slave

そして、これは男性 versus 女性という文化的な二分法 (dichotomy) と同じであると指摘する。India は Hattie に経済的な依存をさせることによって、Hattie を思うように操縦したのであり、India = foreign、Hattie = domestic という対立もある。この domestic-foreign の対立を、男女間の経済的対立でとらえると、domestic = home、foreign = work となり、India が黄色い家の遺贈を business として考えることができた訳が説明できる、と論を展開している。要するに、masculine-feminine、foreign-domestic、master-servant

のような二分法を再構築することによって、我々は“a powerful female character”としてのIndia像を認識できる、としている(146-55)。

Austinは、こうした議論の中で、ベローが女性の主人公を描くのを苦手としているという一部の見方に対して、描けると考えているようである。Hattieの場合、他のベローの主人公と同じように、男性優位の立場から扱われているが、Hattieが従属的、家庭的、女性的であるのに対して、Indiaは支配的、社会的、男性的である。伝統的、保守的な女性観をもつベローとしては、Indiaはフェミニストの見方を感じさせるが、痕跡にとどまっている、という主旨である。これについてコメントすれば、ベローは、*A Theft* (1989)では、母親であると同時にキャリアウーマンであるClara Veldeを主人公にしており、晩年になって、フェミニズムにより理解を示すようになったのではないかという印象がある。

Marianne Friedrichの著作は、“Leaving the Yellow House”に関しては、もっぱら話法の問題や、モノログとinner voiceの関係、inner voiceと客観的描写の関連など扱っており(59-73)、作品の意味について、強い光を当てているようには思われない。

国内に目を転じれば、渋谷雄三郎氏の著述が光を放っているように思われる。氏は注釈書『ベロウ短編集』で、この作品においてベローは、死を受け容れるのが困難な現代の精神的状況を批判していると、次のように述べている。

怪我をしたことから、このアル中気味の72歳の老女は死と対面せざるをえなくなる。彼女はどうしても死を受容することができない。彼女が生きた生活、受けた教育、その中に暮らした社会の習俗、すべてが、死に関して無きが如くに振舞うことを命令し、死をタブーと化している。死をとりこまず排除することに合意している生活様態は、人間必滅の真実に対していかに欺瞞的であることか。ベローは老女の悲惨な境地を通して、繁栄と豊かさの社会

の内面的欠陥を批判している。たんにアメリカだけでなく、近代の進歩改良思想そのものに再検討を強いている。・・・現代は何故に意味ある死を遂げることができないのか。死を意味らしめる生とはどんなものであるのか。

(iv)

さらに、渋谷はこの論点を、論文「ソール・ベローにおける死の意味」でより深く掘り下げている。次の引用は長いが、引用に値するであろう。

われらの時代の科学的了解では、死は一回限りの最終的事故であり、死者は生者の世界にいかなる請求権ももたない。自己の死も含めて死というものに心を奪われることは、病的で不健全であり、つまり生者のタブーの侵犯行為となる。われわれは死が存在しないかのように振舞い、恐怖であれ神秘であれ死が心の奥底に鼓吹するある熾烈さ・現実感を無視することに同意したのである。かつて死者が追悼され語りかけられることによって、社会制度の生きた部分を担った時代があった。現在われわれが似たような行為をし、似たような制度をもっているとしても、それは単なる惰性か激しい変化を恐れる臆病にすぎない。なぜならわれわれは靈魂の存在などを信じることはできないのだから。科学が死とは肉体の元素化以上の何かであると教えていない以上、生者のタブーはいよいよ専制的である。靈魂の信奉は純粹に個人の内奥に秘められていなければならない。他方生者たちは株式会社のように永遠に続く前提で生き続ける。しかし生者のだれでもが心の奥深くで知っている、死の不可避性と確実さを。しかも死の果てに何もないことを。ベローはこの一寸延ばしの自己欺瞞的な生き方を「黄色い家を残して」（“Leaving the Yellow House,” 1957）の女主人公、あの怨念に満ちた酔払いの老女ハッティに描いている「それから彼女は考えた、始めがあり、真中がある、と。最後の項目には尻ごみした。彼女はもう一度始めた—始めがある。そのあとに早

いほうの真中があり、次ぎに真中の真中があり、あとのほうの真中があり、ずうっとあとのほうの真中がある。実際問題としてわたしは真中だけしか知らない。そのほかはただの噂だ」と。ハッティは・・・果てしなく生き続けたい。決して不幸続きだった生涯ではないが、さりとて今は決して幸福ではない。しかしまだ人生を手放す気にはなれない。(302-03)

そして、渋谷は何千年と西欧文化のうちに受け継がれてきた「魔法からの解放過程」、すなわち、我々の時代の刻印である「進歩」の思想が、「人生の意義、実存感の把握に何の寄与もできなかった」ことをマックス・ウェーバーを引用して指摘している。

アブラハムだとかまた一般に古代の農夫達とかは皆「年老い生きるに飽いて」死んだのである。蓋し彼らは各人が皆有機的に完結した人生を送ったからであり、またその晩年には人生が彼らにもたらしたものの意味のすべてを知り尽くしてゐたからであり、かくて終には最早彼らが解こうと思ふほどの如何なる人生の謎もなく、従ってこれに「飽く」ことができたからである。然るに文化人は、その思想において、その知識において、またその問題において複雑且つ豊富となればなるほど、「生きるを厭う」ことはできて「生きるに飽く」ことはできなくなるのである。なぜならば彼らは文化生活の次々に生み出すものの極く小部分をのみ一然もそれも根本的なものではなく単に一時的なものをのみ一その都度素速く捉えてゐるにすぎず、従って彼らにとっては死は全く無意味な出来事ではないからである。(マックス・ウェーバー『職業としての学問』岩波文庫 35-36 ページ) (303)

さらに渋谷は『ペロー—回心の軌跡』の中で、この主題をペローの作家活動全体の中で位置づけ、死の主題がペロー作品の主要なモチーフになっていると次

のように述べている。

死をめぐるの恐怖と自己破壊（『宙ぶらりんの男』）、忌避と妥協（『犠牲者』）、対決と敗退（『オーギー』）、屈服と陶酔（『現在をつかめ』）、超克と勝利（『ヘンダスン』）の屈折した経緯が、ベローの作品群を貫く優越したモチーフであった。（202）。

注

1. 発行年は、短編集 *Mosby's Memoirs and Other Stories* の目次には 1957 年とあるが、初出の *Esquire*, 49 は 1958 年 1 月の発行となっている。この食い違いについては、短編集の出版元が版權を取得したのが 1957 年であり、*Esquire* の発行が翌年 1 月となったという推測もできる。
2. この数は数え方によって異なるであろう。本稿では変更の理由を基準とした。
3. これは、セクション 7 で、Jerry Rolfe が「年金」（pension）と呼ぶものを指すと思われる。

引用文献

- Austin, Mike. "Saul Bellow and the Absent Woman Syndrome: Traces of India in Leaving the Yellow House." *Saul Bellow Journal*, Double Issue 11(2), 12(1) (Winter 1993): 146-155.
- Bellow, Saul. "Leaving the Yellow House." *Esquire*, 49 (January, 1958): 112, 114, 116, 119-126.
- . "Leaving the Yellow House." *Mosby's Memoirs and Other Stories*. New York: Viking Press, 1968.
- Dutton, Robert R. *Saul Bellow*. New York: Twayne Publishers, Inc., 1971.

- Friedrich, Marianne M. *Character and Narration in the Short Fiction of Saul Bellow*. New York: Peter Lang Publishing, Inc., 1995.
- Fuchs, Daniel. *Saul Bellow: vision and revision*. Durham, North Carolina: Duke University Press, 1984.
- 橋本賢二. 『アメリカ短篇小説の伝統と繁栄—20世紀作品論』大阪教育図書, 1995.
- Hoffman, Edward. “Saul Bellow and Jewish Mysticism.” Annual Convention of the Saul Bellow Society of Japan. Shogai Gakusyu Center, Takatsuki. 8 Sept, 2005.
- Kiernan, Robert F. *Saul Bellow*. New York: The Continuum Publishing Company, 1989.
- Nault, Marianne. *Saul Bellow: An Annotated Bibliography*. New York: Garland Publishing, Inc., 1977.
- Opdahl, Keith Michael. *The Novels of Saul Bellow: An Introduction*. University Park: The Pennsylvania State University Press, 1970.
- 渋谷雄三郎. 「ソール・ベローにおける死の意味」高村勝治・岩元巖（編）『アメリカ小説の展開』松柏社, 1977.
- . 『ベロー—回心の軌跡』冬樹社, 1978.
- . （編注）. 『ベロウ短編集』英潮社, 1979.
- 吉田秀和（編訳）. 『モーツァルトの手紙』講談社学術文庫, 2004.